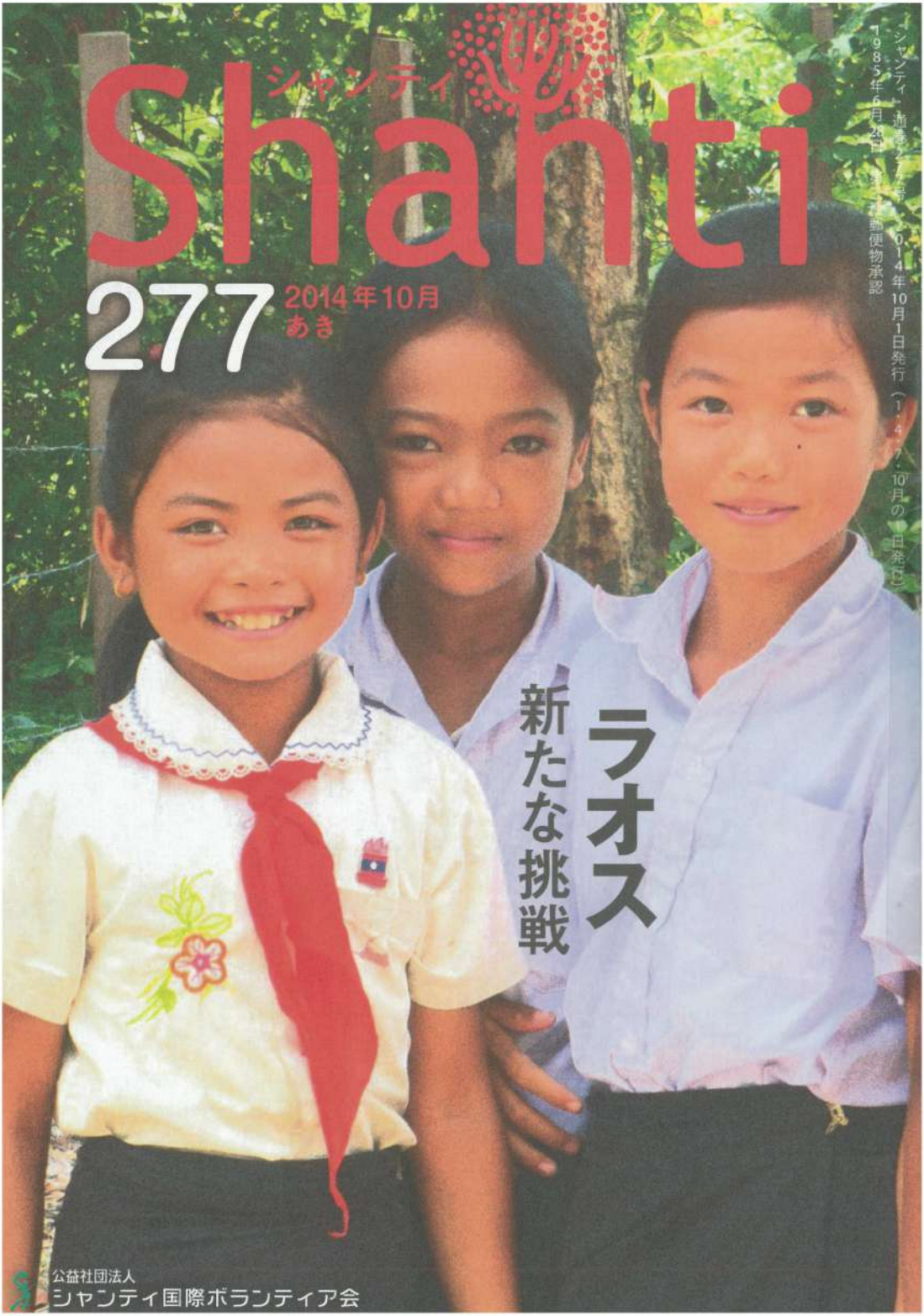
Shanti シャンティ

277 2014年10月 あき

シャンティ 通巻277号 2014年10月1日発行（1・4・7・10月の1日発行）
1985年6月28日 第三種郵便物承認



ラオス 新たな挑戦

公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会

ラオスではルアンパバーン事務所が開かれ、いよいよヴィエンカム郡での活動が本格化していきます。ラオス語ではない独自の言語を話す少数民族が多数を占める教育現場を改善する事業に軸足を移すのは、ラオス事業の新たな挑戦です。活動地の状況をインタビューでまとめました。巻末言では、その源流となるラオス南部セコン県での活動にも触れています。

特集2では、教育の重要な成果である「識字」のことも考えてみました。人間らしく生きるためには、衣食住だけではなく、本も必要。そう考える私たちにとって「識字」とは？　学んでみましょう。

Index

シャンティ　277号　目次

4　**定点観測：アジアから**
タイ／カンボジア／ラオス／ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ
アフガニスタン／ミャンマー／岩手／気仙沼／山元

13　特集1　**ラオス　新たな挑戦**
村の生活を教えてください
新しい校舎はどう？
先生、授業で困っていることはなんですか？
異なる言語を使う子どもたち、学習はどう大変ですか？

21　特集2　**もっと知りたい識字のこと**

26　**世界の絵本を読んでみよう**
民話絵本「ソウの王国」　アフガニスタン

28　**シャンティな人たち**
柴田俊明さん（公益財団法人　伊藤忠記念財団）

30　スタッフの昼ごはん　ルアンパバーン事務所

31　おしらせ／編集後記

32　道

尾根づたいの道を越えて村に近づきました。小学校まではあと少し。
（ラオス・ルアンパバーン県ヴィエンカム郡）

元奨学生からの激励のメッセージ

報告：吉田圭助（シーカー・アジア財団）　写真：瀬戸正夫

タイ **Thailand**

スラム出身の元奨学生オラタイ・プープンラープさん（写真右）と、「スラムの天使」と称されるシーカー・アジア財団特別顧問プラティープさん（写真左）が、6月のバンコク奨学金授与式に参列しました。オラタイさんが、会場に集まった奨学生たちへ激励のメッセージを贈りました。

スアンプルー・スラム出身のオラタイさんは、現在外交官として活躍しています。在ロシア・タイ大使館勤務時にはシリキット王妃をはじめタイ王室の通訳を務めました。

幼い頃、母が営む小さなソムタム屋台を手伝う合間を縫って教科書を読んだことや、自宅の隣にあったシャンティの図書館にある本をほとんど読んだ過去を振り返りました。「私は、プラティープ先生や先達の方のように強い意志を持つことが大切と考え、将来何になりたいかを自分に問いかけています。例えスラムで暮らしていても自信を持ち、両親への恩を忘れず、感謝の気持ちをもつことが大切です。」と語りました。

小さな頃から必死の努力をして自己実現を果たし、現在のオラタイさんの活躍があります。同年代の私も、刺激を受けると共に、自分自身が励まされる思いでした。

読み書きが未来の扉

Cambodia カンボジア

報告：山本英里（カンボジア事務所）

プノンペンの人口約150万人の2～3割がスラム地域に居住しているとみられています。スラムのような貧困地域は、政府が生活再建のために認可した再定住地域とそうでない地域があります。

再定住地域の一つであるアピワットミンチェイは、1997年、道路拡張のために、126世帯が移転を強いられました。政府が国際機関や市民団体の協力を得て、住民と移転を合意、移転後の生活支援も計画に組み込まれました。

移転から17年が経過してもなお、住民の4分の1は貧困世帯に属し、多くの人は屋台で生計を立てていますが、収入は不安定です。住民の半数は小学校程度の教育しか受けられていません。

住民リーダーのチェンチャン氏は、「支援を得て見た目はきれいになっても、読み書きができなければ、未来の可能性はいつまでも広がらない。」と気づいたといいます。最近では、読み書きができるようになりたい！というお母さんが子どもに交じって移動図書館活動に参加する姿が見られます。学びの機会を取り戻したい住民の、読み書きへの挑戦に寄り添っていきます。

ルアンパバーン県にフィールド事務所を開設しました

報告：山室仁子（ラオス事務所）　ラオス **Laos**

6月下旬、ラオス北部にある世界遺産の古都・ルアンパバーン県にフィールド事務所を開設しました。首都ヴィエンチャンから車で約9時間。本や家具や備品などを大型トラック2台に詰め込んでの大移動となりました。

新事務所から事業地のヴィエンカム郡まではさらに3～4時間の道のりですが、これまでより格段に移動時間が短くなるので、事業運営がしやすくなります。

7月初旬には、県および郡行政や関係者の方々を招いて新事務所の開所式を行いました。安全と繁栄祈願の儀式（バーシー）では、関係者から祈願のための白糸を手首にたくさん巻いて頂き、本格的に始まった新事業への期待と責任を感じとりました。

今後は、ヴィエンチャン事務所（主に経理・総務、渉外分野を担当）とルアンパバーン事務所（主にプロジェクト運営を担当）の2事務所体制となりますが、より良い事業を展開していけるよう、密な連携をとりあいながら進めてまいります。

故郷のために立ち上がる時

BRC ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ　報告：タナポーン・ジャルラティウィブーン＝ティック（BRC事務所）

ポーサンソー・カレン・ブリーさん（写真中央の女性）は、7歳から13歳までヌポ難民キャンプで過ごし、第三国定住で親元を離れて姉妹とアメリカで暮らしています。アメリカのことはほとんど知らなかった彼女ですが、英語を必死に勉強し、奨学金をもらいながら大学で人権と難民について勉強しています。そして6月から2ヵ月間ボランティアとしてシャンティの活動に携わりました。

彼女は難民キャンプで20年以上暮らす人々に出会いました。

「難民たちは自由も無いし外の人たちと同じ生活ができず、毎日もがいているわ。でも彼らはいつも笑顔を絶やさないし、今の暮らしに感謝しているの。アメリカでそういう人に出会うことは滅多になかったわ」。

彼女は難民キャンプに戻ってきて幸せに生きるための姿勢を学んだそうです。

「私には夢があるの。それは、アメリカにいる難民の子どもたち全員が高等教育を受けることができる日がくること。だって生まれた場所に関わらず、全ての子どもには良い教育を受ける価値があるのだから」。

復興のシンボルになれるのか「希望のかけ橋」

報告：千葉りか（岩手事務所）　岩手 Japan

陸前高田市の海近くにできた巨大なベルトコンベヤー。それを造成地と中心市街地の間にある気仙川を渡すために作った橋の名前は「希望のかけ（架け）橋」。

今泉地区の高台造成地となる高さ120メートルほどの山を約50メートル近くに削り、住宅地にする作業で出た土砂を中心市街地の最大11メートルになる盛り土として利用するための借り置き場に運ぶ作業を行っています。

「トラックが減って（交通が）安全でいい」と言う人、「こんなものにお金をかけるくらいなら別のところに使った方がいいのに」と言う人、地元でもさまざまな反応がある中で、このベルトコンベヤーができたことによって9年かかる作業が3年で終わる見込みとまで言われています。このコンベヤーが活動するのは2015年の5月までの予定で作業が終了すれば撤去されることになっています。

それぞれ「希望のかけ橋」への感じ方はありますが、皆に共通している「早い復興」のため毎日稼働しています。

「あつまれ、浜わらす!」いかだ体験

Japan 気仙沼　報告：白鳥孝太（気仙沼事務所）

「やったぁー浮かんだ！」子ども達の歓声が波打ち際に響きます。7月23日、気仙沼の小学生19人が市内の海岸に集まり、手作りのいかだ（写真）で海に漕ぎ出しました。

「あつまれ、浜わらす！」は震災で失われた「子どもたちと海の関係」を取り戻すための自然体験の場です。11回目のテーマは「ぷかぷかいかだ体験」。いかだ作りを通じて竹や木、ペットボトル、また、自分の体が、どうしたら海面に浮かぶのかを体感する事が目的です。

22日、漁師さん、地域の大人から竹の切り方やロープの結び方を教わりながら、いかだ作りに挑戦しました。鋸や「ささくれ」で両手を傷だらけにしながら、いかだを組みあげました。そして当日。ドキドキしながら海へ向かいました。全員が海で「ぷかぷか」浮かぶ事を体感し小さな航海を楽しみました。

兄弟で参加した佐々木蓮志君（10歳）、蒼空君（6歳）を家で迎えた母の一恵さん、「小さな海の男になって帰って来ました」と笑顔で教えてくれました。

地元の情報を伝え続けて

報告：古賀東彦（山元事務所）

山元 Japan

山元町の災害FM局「りんごラジオ」は、前身となるコミュニティ局もないまま、発災後わずか10日で、臨時災害放送局（臨災局）として放送を開始しました。

中心となったのは、元東北放送のアナウンサーで町内在住の高橋厚さん（写真右）。

りんごラジオの特徴は、全放送がりんごラジオ制作であること、そして山元町に関する情報のみ流すこと。シャンティの移動図書館の予定も紹介してくださり、運行中に生放送の取材を受けたこともあります。

高橋さんは臨災局の使命を大切にしています。震災により情報の途絶えた町に情報を伝えたいと立ち上げた局。今後コミュニティ局に姿を変えれば維持のため町民に負担をかけかねない。臨災局で始まり臨災局で終わる。町の災害公営住宅が整備され、仮設住宅からみなが移れるようになったときが閉局のタイミングと高橋さん。

山元町のいまを知りたくて、スタッフの方の元気な声を聞きたくて、私たちもラジオを周波数80・7MHzに合わせます。

特集❶

ラオス 新たな挑戦

「次に行く小学校が見えてきたよ」と言われ、車の窓から覗いてみると、小学校のある村は山の上にありました！

ときどき雲がかかるくらい標高の高い村もある、ラオス北部のルアンパバーン県はどんなところでしょうか？。

幹線道路からも離れているこの地域、村人の心配ごと、子どもの学校生活の様子などを聞いてみました。

Q 村の生活を教えてください

カンプーイさん
ポンケオ村　59歳

妻、娘2人、娘婿、孫3人の8人暮らし。孫のワンディーちゃん（6歳）は ポンケオ小学校に通っている。カム族。

ヴィエンカム郡ポンケオ村で生まれ育ちました。山から給水管を引いて、3年前に電気も通じるようになったので、随分と生活しやすくなりました。雨季は水が豊富ですが、乾季は給水タンクの水が不足するので、約30分歩いて小さな川に水をくみに行ってます。

私は農家ですが、平地がないので、山の斜面で陸稲と野菜などを育てています。歩いて20分くらいを1日4～5回往復して、収穫した作物を運びます。雨季は道がぬかるんで滑りやすくなるので、急坂の多い山歩きが大変ですし、がけ崩れも多いです。最近、行政が森林保護のために山の土地利用を規制し始めており、平地の畑を持たない私たちの暮らしに影響がでてしまうのではないかと心配しています。

農作物を売って現金収入を得るのは楽ではありません。私の場合、お米は年に7～8トンの収穫があり、3～4割を売りに出します。お米1トンあたり400万キップ（＝約5万円）の収入です。野菜などの収入を足しても、家族の1年間の収入は多い年で約1745万キップ（＝約23万円）です。この村の土地は作物栽培に向いていて、収穫は多いのですが、それでも一家8人を支えていくのは大変なのです。

（取材に応じてくれたカンプーイさん、「写真を撮るのなら」と袖を通さないで大切にしている上着を着て写ってくれました）

村の家（上）、村の市場で野菜を売って現金収入を得ます（右）

ここがタイヘン！

ほとんどの村に、水道はなく、湧き水を水源にした簡易的な給水所から水をくんでいます。乾季になると水不足が頻発し、給水が制限されます。

ヴィエンカム郡は、ラオスにある143郡の中で13番目に貧しい地域で、要因は道路などインフラの未整備、山岳地形による作付面積の少なさなどです。近年、政府は大気汚染、森林減少を食い止めようと、焼畑の制限を打ち出していますが、それらが貧困層に与える影響も考慮していかなければなりません。

Q 新しい校舎はどう？

アー・ケオマニーちゃん
ドンケオ小学校　12歳

9月の新学期から5年生。父、母、1男4女。の7人家族の末っ子。カム族。

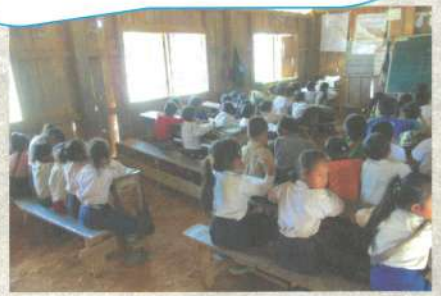
ドンケオ小学校に、昨年、きれいな校舎とトイレが建ちました。前の校舎は20年くらい前に建てられた古い建物で、机の数も少なくて、ひとつの机を3、4人で使っていたので狭かったです。それに、床が外と同じ土でデコボコしていたので机もガタガタして使いづらかったです。雨が降ると床がぬかるみ、屋根にあたる雨の音もうるさくて、勉強にやる気が出ない時もありました。でも今は2人で机に座って、楽しく勉強しています。この前の期末試験では学年で7番目の成績でした。

あと、前はトイレがなくて、茂みの中で用を足していましたが、今は誰かに見られる心配もなく、安心してトイレに行くことができます。

校内清掃も毎日きちんとやっています。私の家は学校のすぐ近くだから、もちろん毎日通っているけれど、前より学校に来る子が増えたみたい。休み時間は教室に残って本や教科書を読んだり、時々、男の子に混じってサッカーをして遊んだりしています。

たくさん勉強をして、将来は先生か看護師になりたいです。

昨年できあがったドンケオ小学校の新校舎



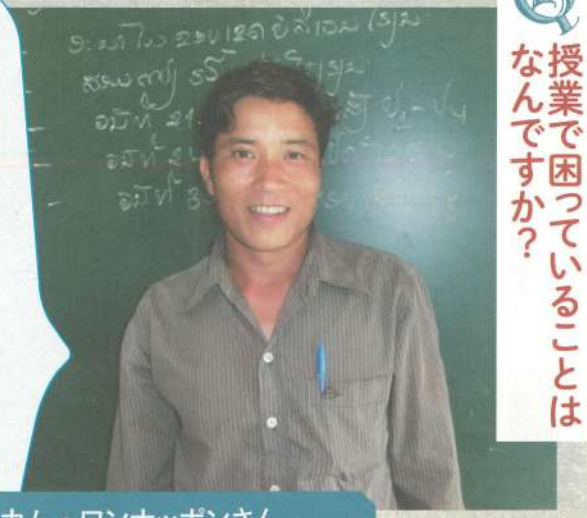
床が土のままで壁にも隙間がある、改修が必要な校舎。ドンケオ小学校も以前はこのような状態でした

ここがタイヘン！

村人が竹やバナナの葉で作った簡易校舎を対象にシャンティは、ヴィエンカム郡で校舎の改修支援を行っています。

簡易校舎は床がなく建物の基礎部分も石で支えているだけなので、強風で倒壊してしまう危険性があります。教育スポーツ省と連携し、コンクリート校舎と十分な学習機材を提供し、安全で快適な学習環境を整備しています。また、村人が資材を準備するなど、住民を巻き込み、「村の学校」として彼らの所有意識を高めるように配慮し、村全体の教育意識の向上も目指しています。

Q 授業で困っていることはなんですか？



カム・ワンナッポンさん
プーカン小学校校長　31歳

教員歴は11年。2012年から校長になる。現在は4・5年生を教えている。カム族。

プーカン小学校は、5学年に対して教員が3人しかいません。1年生、2・3年生、4・5年、と3つに分けて授業を行なっています。いわゆる複式学級です。私も4年生と5年生を担任しています。

教科書・教材不足もですが、複数の教室を行き来しながら授業を行う複式学級も大きな課題です。4年生に教えた後、隣の教室で5年生を教える時、4年生には練習問題などの自習課題を与えているのですが、私が教室からいなくなった途端に児童たちが騒ぎ、隣の教室での授業が進まなくなってしまうのです。

複式学級に関する研修を2009年に1度だけ受けたことがありますが、いまだに児童たちをどう指導して授業を進めたらいいのかが悩みの種です。教員の増員ができない以上、この複式学級で教えるための知識・技術をもっと身につけたいです。

これから行われるシャンティの研修が楽しみです。

複式学級用の黒板（左）、下校の時間（右）

ここがタイヘン！

ヴィエンカム郡の小学校の全157学級のうち、127学級が複式学級です（教育スポーツ省2012年調べ）。これはラオスの全郡のうち、4番目に多く、子ども、教員双方にとって、授業の実施と学習が困難な一因となっています。

近年、ラオスは小学校の完全校化（1年生から5年生まである学校）を進めており、特に地方では学級の数に比べて教員の数が足りず、複式学級の運営の問題は深刻です。複式では1人の教員が複数の学年を並行して教えるため、別の学年を教員が教えている間の自習時間の効果的な活用、短い授業時間の中での児童が授業へ参加できるようにするなど、教員により高い技能が求められています。シャンティは、教員の指導能力の強化に焦点を当てた事業をヴィエンカム郡で実施しています。

Q 異なる言語を使う子どもたち、学習はどう大変ですか？

ワンヂョイ・ワッスァリーさん
ヴィエンカム郡教育スポーツ局・副局長　44歳

6、7年間、郡教育スポーツ事務所に勤めている。モン族。

私はヴィエンカム郡教育スポーツ事務所に勤めていますが、この地域特有の課題というとやはり民族の言語に関係することでしょう。

ヴィエンカム郡は人口2万9867人のうち大半がカム族、モン族の少数民族で、ラオ族は10%です。

ラオスでは、ラオ族が母語とするラオス語が公用語になっており、小学校でラオス語を学びます。

しかし、少数民族のカム族、モン族の子どもにとって、ラオス語は家庭で使っている言語ではないため、特に低学年の子どもは大変です。

少数民族の言語を話せない教員は算数の授業で「ここにみかんが2つあります」と例題を出したくても、言語がわからず不自由を感じてしまうのです。教員が少数民族の言語を話してみるものの、発音が違うために児童がききとれないといったケースもあり、教員の授業に対するやる気が上がらないという問題も出ています。

私はモン族なので、子どもの頃に授業を受けるのが大変だったことをよく覚えています。私たちが理解できるまで、教員が簡単な言い回しでくり返し説明してくれたものでした。

少数民族の子どもたちの教育の改善は郡教育スポーツ局の掲げる目標と合致していますし、この事業に期待をしています。この事業の成功を目指して向かって、一緒にがんばっていきたいです。

子どもも畑で採れた野菜を運びます

ここがタイヘン！

ヴィエンカム郡の小学校に通う子どもたちの多くは、ラオス語を母語としない子どもたちです。ラオスでは、初等教育は公用語のラオス語で行われることが教育法で決められています。そのため、小学校低学年は民族言語での学習、高学年から公用語での学習などの言語の移行に配慮した教育政策ができないのが現状です。ただし、少数民族出身の教員がいる学校では、子どもたちがラオス語をより効果的に学ぶために、民族言語での補足説明が認められています。しかし、少数民族教員の数は限られ、ラオ族出身の教員が多い現状では、教員と児童の意思疎通がままならない学級も多く、特に1年生の留年率が高くなるなど、初等教育にとって大きな課題となっています。

地方の農村でも貧困と言語の壁をこえて子どもが学べるように

ヴィエンカム郡で行う2つの事業

新規事業地はどんなところ

ルアンパバーン県ヴィエンカム郡は、世界遺産の古都ルアンパバーン市街から、約200キロ、車で4時間ほどの行程を、尾根を切り開いた山道を行くと到着します。人口は約3万人。住民の大半は少数民族のカム族とモン族です。焼畑農による陸稲の栽培、タケノコや木の実、ススキなどの林産物採取が主な生業です。

小学校の校舎改善事業は

対象地域には、老朽化や粗悪な建物などの影響で安全面が確保できない校舎が多くあります。耐久性のあるコンクリート校舎に立て替えることで児童の安全面と学びやすさを確保しています。さらに、村人を対象にした研修会を実施することで、子どもを取り巻く教育環境について、地域全体で考える機会を作り、学校と地域の関係強化にもつなげています。限られた教育予算では、学校の問題の全ては解決できないことから、学校運営への住民の協力が求められています。

（表）

（裏）

ラオスで作成した単語カード（フラッシュカード）
表にイラストとラオス語が、裏に少数民族言語でどう発音するかを描いてある教材です
教員が少数民族言語を知らなくても、児童が楽しくラオス語を学べるよう工夫しました

ヴィエンカム郡で行う移動図書館活動

2013年まで行ってきた公共図書館支援活動により培ってきた図書館員とシャンティ職員の知識と技術を活かしていきたいと思います。この活動を通じて、単に子どもたちが本を楽しく読むことだけでなく、学校教育においても良い影響を与えることを現場の教員に伝えていきます。この事業では、研修会で学んだ知識や技術が、より教員に定着するための働きかけの一つとしてモニタリングの充実を図っています。研修で習得した内容を実際の教室で実践してみると、また新たな課題が出てくると思います。それらを教員と協力して一緒に課題の解決に取り組んで行きます。

プロジェクト・マネージャー
カムコーン・クンチャムヌン

れています。

教員を対象にした事業では

学校の教員が円滑に授業を展開できることをめざしています。対象地で多く見られる複式学級での授業は、教員にとって大きな負担になっており、学校の教員が効果的な指導ができるようにします。また、児童4人で1冊の教科書を使用している現状なのに、授業を補助するための教材がほとんどありません。シャンティがこれまで培ってきた絵本出版の経験を生かし、カム族やモン族の民話を中心に絵本と紙芝居を作成し、移動図書館活動を実施して、児童の「読みたい、知りたい、学びたい」の心を育てます。

教員と子どもが意志の疎通ができるように

児童の多くが日常的に使用している言語はラオス語ではないことから、ラオス語の単語カード（フラッシュカード）を作成します。カードの表面の絵柄は児童が日々の生活で親しんでいるものを題材に、裏面にはそれぞれ言語表記と教員が子どもたちに行う質問のサンプルが載っています。児童が絵柄といっしょに楽しくラオス語が学べること、そして教員もラオス語以外の言葉を知ることができ、児童と教員の距離も縮まることが期待できます。

（加瀬貴）

新事務所で事業に取り組む職員たち

ラオスに赴任して半年が経ちました

今年3月にラオス事務所に赴任してから、ラオスという国のこと、事業のこと、現場での生活術など、毎日何かしらの発見があり、学び多き日々が続いています。

毎日の業務の中で印象的に思うことは、何事もチームで進めていくことの大切さです。現地職員と話し合いを重ねて、細かいこともひとつひとつ一緒に決めていきます。時折、ひとつの決定をするまでに時間がかかったりして、うまくいかずに自分の力不足を感じることもありますが、子どもたちにより良い教育環境をつくるために必要なこととは何かと自問自答しながら業務にあたっています。

また、チームは現地職員だけではありません。現地の協力機関である教育スポーツ局の職員や関係者とも話し合いながら事業を進めていきます。教育局職員や小学校教員と話をするとき、皆さんが「一緒に頑張りましょう」と言ってくれます。一方的ではない進め方は当たり前のこととも思えますが、皆で同じ方向を向いていることがとても心強く感じます。

最後に、日本で応援して下さっている皆さまから頂く言葉は私たち現場で働く職員にとって非常に励みになっています。これからも「私たちと一緒に」ラオス事業に関心を持って頂ければ幸いです。

ラオス人職員のオイ（右）と打ち合わせする山室（左）

ラオス事務所調整員
山室仁子（やまむろ・さとこ）

村の子どもと談笑する加瀬貴所長。ラオスに赴任して1年半になりました。

将来を選択できる社会になってほしい

ラオス事務所長 加瀬（かせ） 貴（たかし）

2014年から、ルアンパバーン県ヴィエンカム郡にプロジェクト対象地を絞り、地方農村地域に住む、より困難な人びとへの支援をスタートさせました。対象地を絞ったのは、域内すべての教育関係者がその恩恵を受け、教育発展が点ではなく面として達成できることによる持続可能性や自立発展性を前提に考えたためです。

対象地の人口の90％以上は少数民族の人々です。少数民族が多数を占める地域での取り組みは、ラオス事務所としても大きな挑戦になります。シャンティの基本姿勢の1つである「地域の伝統的な文化を重視し、民族、宗教、言語の違いを尊重します」という意味を職員一同、それぞれの胸に問いかけながら、それぞれの民族が持つ豊かな文化に敬意を払い、事業をていねいに実施していきたいと思います。

ある日、ヴィエンカム郡で出会った子どもたちに夢を聞きました。子どもたちは、「学校の先生になりたい」、「お医者さんになりたい」、「警察官になりたい」など、たくさんの夢や希望を私に語ってくれました。それらを聞いて、ラオスの地方農村が、そこに住む人びとにとって、将来や希望を選択できる社会になってほしいと感じます。

ここでは、人びとの無邪気な笑顔や素朴さ、自然の豊かさに、感銘を受けています。それは、私に「変化」、「発展」の意味を突きつけてきます。「変化や発展は必要なのだろうか」と思い、苦悩することもあります。

それでも、発展とは、人びとが「こうしてみたい、ああしてみたい」という思いが、すこしでも実現できる社会、選択肢を持つことができる社会に変化していく上に成り立つと思っています。多くの人びとが豊かな選択肢を享受できるように、お手伝いを続けていきたいと思います。

特集❷

もっと知りたい識字のこと

阪神淡路大震災の復興支援で、当会が支援した識字学級を担当していた藤井隆英さんは、そこに通ってきた在日の高齢者が、文字を書く喜びを得ていくところを目の当たりにして、「文字を学ぶとは、学ぶ根本である」と感じたといいます。「学ぶことは人間にとって普遍的な喜びです。それは海外の子どもにとっても、同様のことでしょう」と。2011年、世界の成人非識字者（読み書きできない人）数は7億7400万人。そのうち、およそ3分の2は女性です。幸せな生活を築くために、知識や情報を生かせるようにするのが識字の役割と語る、田島伸二さん。専門家の目線から伺いました。

生きるための識字

国際識字文化センター
田島伸二（たじましんじ）

1977年からユネスコ・アジア文化センター（ACCU）で、識字教育を実践され、国際識字文化センターを立ち上げられた田島さん。この7月、ついに完成したカンボジアのコミュニティ・ラーニングセンター（CLC）での活動にアドバイザーとして一緒に取り組んでいただいています。人が生きていくうえで、どう識字が大切なのか、お伺いしました。

カンボジアのコミュニティ・ラーニングセンター

コミュニティ・ラーニングセンター（以下CLC）を建設する前に、ニーペック村で、村民と一緒に、将来の「夢」や直面している「問題」をテーマにした絵地図ワークショップを行いました。全く読み書きができない人が半数ほどいたのですが、読み書きできる人がそれを聞き書きしながら、みんなで助けあって行いました。絵地図には、村の深刻な問題点や生きる目標ともいうべき夢が楽しく表現され、みんなで分析しながらCLCでやるべき問題へと絞り込んでいきました。

今、シャンティのCLCは、村々の具体的な改善に向けて動いています。これはアジア地域の中でも、画期的なノンフォーマル活動となっています。今年の前半、先駆けて村人に、粘土で効率的なかまどの作り方を教えたら、半年後には、「燃料が半分で済むようになった」と大喜びし、村人は、そのかまどをすぐに3つに広げていきました。CLCの建物の完成と同時に、村が直面している農業生産、健康問題、トイレの欠如といった村の問題解決のために、現在、CLCで活用する成人用の8種類の識字教材も作成しています。

識字教育では、知識や情報が、自分の人生にどう役に立つのか？ということを実感し、実践してもらうことが大切です。ゆくゆくは、6つの村が共同で情報交換を行いながら、それぞれの村のユニークな物産を一村一品運動のように広げていけるといいですね。村の志願スタッフは、本や知識が好きなだけではなく、農村の生活を実際に改善していける力が必要でしょう。さまざまな知識や情報が、生きた識字力となって、村人の生活を豊かにさせていく積極的なリーダーも必要です。当事者はあくまでも村民自身ですが、シャンティは、それをファシリテートし、統合し・運営に協力する大切な役割を担っているのです。

CLC開館式典に集まった村人

人間的な識字（ヒューマン・リテラシー）が必要

識字は、人生や社会の幸せに寄与するためのもので、それは宮澤賢治が書いていた「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」ということに深くつながっています。目的や方向を間違った識字（リテラシー）は悲惨をもたらすと同時に、両刃の剣ともなりうるのです。

1998年5月、私は、パキスタンのパンジャブ州の農村地域でノンフォーマル学校を二百校設立する式典に出席した時、教育大臣の口から次のような祝辞を聞きました。「今日、わが国には10数人のカディール・ハーン博士のような科学者が存在している。彼らの努力によって今日、われわれは素晴らしい科学技術を達成することができたが、識字教育とはこのような科学技術の発展に大きく貢献するものである。識字学校が、ますます増えることによって、我が国の核開発がますます進展していくことを希望する。云々」

私はこれを聞いて怒りが込み上げてきました。カディール・ハーン氏とは、パキスタンの原爆開発の父とも言われる有名な科学者です。もし識字が、核開発のような目的のために使われるものならば、その識字は完全に間違っているのではないかと。そして、私はその為政者が発言した識字に関し、咄嗟に「ヒューマン・リテラシー」という新しい概念を考えついたのです。

「識字とは人間を生かす哲学や方向性を持たなければならない。識字とはただ単に読み書き計算ができるかどうかの技術や能力の問題ではなく、豊かな人間性を有し、普遍的な目的や生き方をめざすものでなくてはならない。これまでの歴史では、人を不幸にし、人を殺す識字がどれだけ推進されてきたことか、そして現在もまたそれは続いている。文字によって表現される知識や技術は、人間のありかた全体に真摯なる責任をもたなければならない。識字とは人を生かし、争いをなくし、人間同士が信頼できる世界をつくるためにこそ存在する。」今日の膨大な知識や情報は、豊かな世界や幸せな世界を築くためにこそ活用されるべきです。

成人の識字がなぜ必要か

識字の原点は、生活の中で、生きた知識や情報を自由自在に取り出し、それを再び自由に表現するだけでなく、自分とは違う世界に住む人びとの立場にも立てる豊かな想像力を身につけることです。現代のように変化の激しい時代、生き残っていくには、多様な価値観や選択肢の中から、きちんと自分の求めるものを適確に選び、理解できるようになることが必要です。そのためには、自らの内面を深く掘りさげ、社会を具体的に改善していくための識字能力は必須です。「人間らしく生きたい」という叫びは、実は「人間らしく生きられる知識や情報を持ちたい」という叫びに他なりません。ポルポト時代の凄絶な歴史体験を有するカンボジアの人々が、より豊かな社会や幸せな生活を築いていけるようにより進化した識字教育への挑戦を心から応援したいと思います。

ニーペック村での絵地図ワークショップ

基本的な読み書きの力で生活はどう変わるのか「EFAグローバルモニタリングレポート」を読んでみよう！

「EFAグローバルモニタリングレポート」とは、EFA（Education for All=すべての人に教育を）目標に対する200の国や地域の現状を調査報告したレポートです。

この2013／4年版レポートでは、世界中で2億5千万人の子どもが基礎的な学力を身につけていないとしています。職に就き充実した生活を送るのに必要なスキルを習得したら、この子たちはどう変われるのか、教育がもたらす利点をこのレポートで見てみましょう。

「すべての子どもが基礎教育で基本的な読解力を身につけることができれば、1億7100万人が貧困から抜け出すことができる」

農村部に住んでいる人も最新の知識や技術を身につけて、作物の生産性を高めたり、価値の高い作物を生産するなど、収入を増加させていました。また、農業以外の仕事に就くことができて、収入源を多様化させていました。また、教育を受けた親は子どもにより高い教育を受けさせるようになり、貧困の連鎖が断ち切ることができてきます。

「教育は人びとの健康状態を改善する最も有効な手段の一つである。数100万人の母親と子どもの命を救うだけではなく、病気や栄養失調の予防にも貢献する」

女性への教育を改善した結果、1999年からの10年間で乳幼児の子どもの命が210万人救われたという調査結果がのっています。低中所得国の全ての女性が中等教育を終了させれば、子どもの死亡率は49％低下して、毎年およそ280万人の子どもの命を救うことができると予想されています。

「教育は環境汚染の防止や気候変動の影響を最小限に抑えるのにも重要な役割を果たす」

質の高い教育を届けるにはもっと教員を増やして質を上げ、適正に配置することが優先です。政府は教育への投資を増やし、援助国も援助額を増やす必要があります。すべての人が識字力を高め、生活力をつけていくことが世界全体の環境にも影響するとのこと。

自分たちの国や地域のことだけを考えるのではなく、広く世界に目を向けていくことが、長い目で見て世界の安定に役立つのです。

シャンティの活動地の教育の現状

	初等教育の純粋就学率	15-24 歳の識字率	成人の識字率	小学校最終学年の残存率
タイ	90%	98%	94%	NA
カンボジア	98% (96%)	87%	74%	61%
ラオス	97% (97%)	84%	73%	68%
アフガニスタン	NA	NA	NA	NA
ミャンマー	NA	96%	93%	75%
開発途上国平均	90% (88%)	88%	80%	83%

（出所：GMR2013/14，2011 年データ　NA：不明）

※「EFA グローバルモニタリングレポート 2013/4」を読みたい方は、シャンティへお問い合わせください。メールアドレスは pr@sva.or.jp（担当：清野）

BOOK GUIDE　識字について学ぶ6冊

「識字の社会言語学」かどやひでのり、あべやすし編（生活書院）2010年
文字をよみかきできないひとびとにとって、文字はどのようにせまってくるものなのか？「識字」「非識字」のなにが問題であり、なにをするべきなのか。識字問題の解決のために、ほんとうに必要なことはなにかを考える。

「生きるための読み書き――発展途上国のリテラシー問題」中村雄祐（みすず書房）2009年
読み書きと生存の関係について、とりわけ途上国における「紙とペンの読み書き」の現状、そして今後の展望を考察。最新の研究成果を踏まえ、自ら関わった南米ボリビアでの職業訓練プロジェクトをもとにした書。

「生きなおす、ことば　書くことのちから――横浜寿町から」大沢敏郎（太郎次郎社）2003年
大沢氏が主宰している識字学級は出入り自由。しかし、その場は、文字を奪い取られた人々にとって、文字を取り返し、人間の尊厳を取り戻す場でもあった。初めて参加した時には、その場に圧倒されて、文字を刻むことはできなかった。2007年に大沢さんは他界。当時を知るのに貴重な一冊。

「夜間中学生　タカノマサオ――武器になる文字とコトバを！」高野雅夫（解放出版社）1993年
高野さんは、満州で戦争孤児となり、逃避行を繰り返し、九州から東京へ。21歳で夜間中学に入った。バタ屋のお爺さんと出逢い文字を奪い返し、やがて夜間中学校廃止勧告反対を叫ぶ全国行脚へ。「敗者復活戦」と名付け夜間中学運動に邁進。教育の原点と識字とは何かを迫る。

「識字運動とは　人権ブックレット37」元木健、内山一雄（部落解放研究所）1992年
1990年の国際識字年を契機に関心の高まった識字について、基本概念と国内外の識字運動をまとめた基本書。（世界の識字問題、ユネスコと国際識字年、識字運動の国際的な動きなど、日本の識字運動の意味するもの、あゆみ、識字運動の現状と課題）

「被抑圧者の教育学」パウロ・フレイレ（亜紀書房）1979年、2011年（新訳）
被抑圧者の教育学とは深い意味において、自らの解放のための闘いをめざす人々のための教育学であり、そこに根がある。被抑圧者が"全き人間"となるための条件を徹底的に思索する。

ゾウの王国

د پیلانو پاچهي

世界の絵本を読んでみよう❽
民話絵本　アフガニスタン
（2012年）

1

むかしむかし、
動物たちがすむ森がありました。
この森ではゾウがいちばん強く、
やりたいほうだいにして、
動物たちにきらわれていました。
小さい動物たちを、
ふんで歩いていくのです。

2

森の動物たちはこまって
話しあいました。ネズミが
「ぼくのきょうだいもゾウに
ふまれて、しんでしまった。
ゾウの王さまに、ゾウが悪さを
していることを伝えてみるよ」
といいました。
動物たちもさんせいです。

3

ネズミは宮殿で
やっとゾウの王さまに
あえましたが、
ネズミの声は小さくて、
王さまにはきこえません。

4

ネズミは王さまの耳の中に
とびこんで、大きな声で
「ぼくたちをふみつけることを
やめさせてください」
といいました。王さまはびっくりして、
「そんなひどいことをしているなんて、
しらなかった。すぐに止めさせよう」
とやくそくしてくれました。

5

王さまはけらいをあつめていいました。
「ちいさな生きものをふまないように、
足もとを見て歩きなさい。
歩くときは足おともたてるように。
したがわないものには、ばつをあたえるぞ」

6

それいらい、ゾウは
他の動物にやさしくなりました。
動物たちもりょうしから
ゾウをかばって、おたがいに
なかよくくらしました。

シャンティな人たち

शान्ति

vol. 66

柴田俊明 しばた・としあき

公益財団法人　伊藤忠記念財団

伊藤忠記念財団では、1975年から「子ども文庫助成事業」を継続されています。全国の文庫活動はボランティアで運営されている方がほとんどで、その文庫に対する助成は子どもの読書啓発活動を支える大切な事業です。長くこの事業を担当していた柴田さんへ、文庫に関する思いを伺いました。

高校時代から子ども会を手伝っていた柴田さんは、入社のときから児童館の「ジュニアキャンプ」など、子どもと関わる現場で過ごしてきた。しかし、8年前、児童館から子ども文庫助成の部門に異動になり、何十年も「子どもたちの成長のために」と文庫活動を続けている人と出会って、子ども文庫の魅力を知った。

文庫の良さは、子どもを受け入れてくれる場所であること。思春期の難しい年頃になって文庫にやってきたとき、幼いときに通った空間、人がそこにいるという喜びは公立図書館では味わえないもの。文庫の数こそ減っているが、火は消えていない。

「退職した男性をどんどん巻き込んだり、受け身になりがちな高齢者が読み聞かせできるよう育成したり」と、さまざまな年齢の人が関われる場所であり、社会に必要な場所だと感じている。

子どもと関わっている方の社会感覚が魅力になっている。本や書評をよく読み、視野が広く活動力もあるので、文庫関係者はいつまでも若々しい。

助成金に命を吹き込んでくれる人がいる、子どもと運営者の笑顔が広がっていくのが目に見える、というやりがいになっている。

「子どもたちのためになるんだったら、という気持ちで皆さんは文庫をやっていらっしゃる。それが宝だと思っています。伊藤忠記念財団はその思いを伝える代弁者にならなくてはいけないんです」。

文庫を大切に思う姿勢は、助成を決定する過程にも現れている。助成金を申請した文庫全国130ヵ所をすべて担当者3人で回っているという。「助成できる先には限りがありますから、選考から漏れてしまう文庫もあります。助成から漏れたからといって、私たちの活動はダメだったんだと思って欲しくない。せめて思いを受け止められるよう訪問して回っています」。

柴田さんは、10月末をもって、伊藤忠記念財団を退職するとのこと（取材は7月中旬）。これからのご予定を伺うと「子どもと触れあう現場に戻りたいという気持ちが強いです」。キャンプや子どもの安全、読書に関わる活動を続けていく意向だとのこと。笑顔がいっそう温かくなった。

（清野陽子）

上：「子ども読書支援」を受けたたんぽぽ保育園（福島県郡山市）
下：「子ども文庫助成」贈呈式の懇親会で文庫運営者の皆さん

これがワタシの
チカラになる！

スタッフの昼ごはん

ラオスで図書館事業を担当しているヴァンコムです。絵本出版と教員育成を担当しています。自宅でお昼ごはんを食べることが多いのですが、事務所の台所で仲間たちと仕事以外のたわいもない話をしながら、お手伝いさんに買ってきてもらったごはんを食べてリフレッシュする時間も好きです。よく食べるルアンパバーン名物の麺・カオソイは、豚や鶏で出汁をとったスープに太目の米麺とトマト入りの肉味噌を合わせた絶品料理です。好みで辛味を入れますが、ルアンパバーンはヴィエンチャンよりも辛い物好きな人が多いようです。いつも私たちの活動を支えて下さりありがとうございます。日本の皆さまにもルアンパバーン名物の料理を食べてほしいです。（ヴァンコム談）

ແຊບຫຼາຍ　セーブライ（おいしいよ）

シャンティからのお知らせ

「本の力を生きる力に」キャンペーン

世界には、紛争、貧困、自然災害などで、本を手にすることができない人たちがいます。大人の6分の1が文字の読み書きができません。

シャンティでは、2014年から「本の力を、生きる力に。」キャンペーンを開始しました。これは、「本を知らない人たち」が「本の力」に出会う機会を、その力を知るみなさんと一緒に協力しながら提供していくシャンティの活動を、多くの方に知っていただくのが目的です。

特設ホームページでは「なぜ本の力は生きる力になるのか」、「本を読むことで拡がる世界」について詳しく解説し、「なぜ本が必要なの？」と題して、識者の方の対談を連載しています。

「本を開くことは、未来を拓くこと。」本を知らない子どもをなくし、未来に希望を持てるように、ご協力をお願いいたします。

「本の力を生きる力に」特設ホームページ
http://sva.or.jp/book-for-all/

12月にクラフト・エイド新製品

クリスマスのプレゼントにどうぞ。また、新製品の発表会を12月に都内で開く予定です。お問い合わせは担当（渡辺、中尾）へ。

人事のお知らせ

●入職
中尾乃絵（契約職員）国内事業課クラフト担当（8月1日付）

●退職
小野豪大（正職員）ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所所長（7月24日付）

シャンティの本棚

『偶然の装丁家』矢萩多聞（晶文社）

「シャンティ」の装丁デザインを手がける矢萩さん。小説や学術書、ビジネス書まで装丁した本は2002年から現在まで350冊以上に。絵を描くのが好きな少年時代から、インドと日本での暮らし、装丁の仕事について、自分の言葉で考え語られている。

『追憶のカンボジア』チュット・カイ著／岡田知子訳（東京外国語大学出版会）

フランス植民地時代にメコン川流域の豊かなコンポンチャム州に生まれた著者は、クメール・ルージュの時代を生き抜き、フランスに難民として渡った。幼少時代の思い出を描いた小説三篇。

編集後記

先月終了したNHK連続テレビ小説「花子とアン」。明治から大正にかけての日本はシャンティの活動国と生活状況が似ており、興味深く見ていました。小作農家という貧しい環境に生まれた花子が、女学校で教育を受けて出版社や翻訳家の仕事を得て自立していく姿に、教育や識字の成果を重ねあわせました。また、5歳の息子を疫痢で失う場面もありますが、乳幼児死亡率は女子教育を進め、衛生状況を改善することで防ぐことができます（24ページに詳細）。改めて教育を普及していく大切さを感じますね。（清野陽子）

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
GREEN PRINTING JFPI P-B10164
ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C009309
VOC FREE™
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

シャンティ　2014年秋　277号
2014年10月1日発行

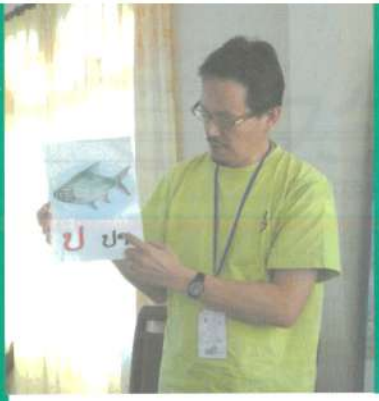
発行人　若林恭英
発行所　公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233　FAX 03-5360-1220
WEB：http://www.sva.or.jp　E-Mail：info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724
編集人　関尚士
装丁・レイアウト　矢萩多聞
印刷　株式会社大川印刷　［定価550円］

©2014. Shanti Volunteer Association. All Rights Reserved. Printed in Japan.

●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

巻末言

道



開発Developmentの語源は'De-(反対の意味の接頭語)とEnvelop(包む)と-ment(名詞を作る接尾語)。包みや覆い、封筒(envelope)を開いて、中にあるものを取り出す行為となる。

「美しき多様性」を目指す少数民族支援

小野豪大(おのたけひろ)

開発の定義はさまざまあるが、私はこのシンプルな解釈が好きで、ラオス駐在時代を追想しながら、このDevelopmentの解釈を思い出した。

2000年頃のラオスは、多様な少数民族の存在を誇りつつも、彼らをラオス語識字教育対象者と見なしていた。主流民族が少数民族の言語を理解しながら教育活動を…なんて発想はなく、一方的に主流民族の言葉(ラオス語)や文化を学んでもらうという方針であった。さらに教育省からは、口承文化の少数民族言語に文字を考案されては国家統一の支障になると警戒された。

そんな中、南部セコン県で始めた「民話による初等教育改善事業」では少数民族から民話や生活の言葉を学び、教材を制作、活用しながらラオス語普及に生かしていこう、という方針を立てた。少数民族と主流民族の言語や文化は決して対峙するものではなく、教育活動はそれぞれの素晴らしさを認め合う中に展開されるべきである。その精神的支柱はシャンティの「定款前文」にある「美しき多様性」という言葉に示されていたように思う。

ラオスでは、伝統的に集会や結社の自由が制限され、市民が権利を主張すべく立ち上がることも難しく、現地NGOの登場もごく最近である。そんな中でDevelopmentの語源に忠実に少数民族に光を当てたシャンティの視点、方法は正しかった。組織的には、1980年代にタイのカンボジア難民キャンプでクメール語図書を復刻、そして1990年代にタイのミャンマー(ビルマ)難民キャンプでカレン族の民話絵本をカレン語とビルマ語で出版した経験を持つ。これらがラオスでの「民話による初等教育改善事業」への重要な布石になっていたのである。

シャンティは、ラオスに限らず、対象国の中で教育・文化における多様性の維持、発展にどのように寄与するのかという命題を負っている。民族のはざまに立って、それぞれの民族的価値に光を当て、その多様性をより誇らしいステージへと押し上げていくことがDevelopmentと言えるなら、私はその担い手としてのシャンティにこれからも期待したい。

(前ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ事業事務所長)